

## 月の花挽歌 ～6.女が階段を上る時～

### 6-6

微妙な間を置いてから、「前に連れて行ってくれた帝国ホテルのバーで、チョイと飲みながら食事でもどうかなと思って」と横田は真紀の気持ちを押し量るように言った。

心にさざ波が立つような女のモヤモヤ感をなだめるには、お誂え向きのセッティングの提案をしてきた男の抜かりなさに、「1時間後でよろしいですか」と女は同意するしかなかった。

帝国ホテルファンの真紀は、住まいから近いせいもあって、レストランやバーを息休めに良く利用した。

なかでも、本館中2階にあるメインバーのオールドインペリアルバーは、旧帝国ホテル本館設計者のフランク・ロイド・ライトのデザインによる造作や家具や備品などが存続する唯一のスペースであり、午前11時半から24時（ラストオーダー）迄、年中無休で営業している上に、隣にあるフレンチレストランのレセゾンから一品料理を取り寄せることもできたので、より利用頻度は高かった。

愛車はまだディーラーから戻っていなかったもので、東京メトロ日比谷線銀座駅から一駅目の日比谷駅で降りて帝国ホテルに入った真紀は、1階のクロークに傘とコートを預けた。

クローク係の女は普段通りの対応をしていたが、真紀の艶美な風情に瞳が揺れていた。

すでに横田はテーブル席でジン・トニックを飲んでいた。

「お待たせしました」と儀礼的に真紀は言うてから向かいの席に座った。

顔なじみのウェイターが注文を取りに来たので、白ワインを炭酸水で割ったカクテルのスプリッツァーを頼んだ。

「仔牛肉のグリルにしたけれど、あなたは……？」と横田は空腹感を滲ませて尋ねた。

「遅い朝食を取りましたので……」と真紀は答えた。それは嘘ではなかったし、食事をする気分にもなれなかった。オールドインペリアルバーは二度目のはずなのに常連客のごとく振る舞う男が疎ましかった。

男は女の気に障る言い草に無表情を装い、押し黙ったまま、ジン・トニックを飲んだ。

壮麗にして創造性が息づく店内には、耳を澄まさないと聴き取れないほどのBGMが密やかに流れていた。

バーテンダーのシェーカーを振るリズムカルな小気味よい音のせいで平静さを取り戻した真紀は、ここを待ち合わせの場所に選んでくれた男に対して不満など思ったりしてはいけないという余裕が生じた。

「お気に召したようですね？」と真紀は微笑みながら言って話を逸らせた。